1

夕暮れの盛り場には期待が満ちている。おいしい思い、楽しい目、ぞくぞくするような刺激を求めて、何万人という人間たちが流れこんでくるのだ。

期待の中には、ひと儲けしてやろうというものも混じっている。パチンコ、麻雀、ゲーム機、カジノバー、そしてより非合法なギャンブル。さらには、カモを見つけてうまく有り金をはたかせてやろうという手合いだっている。いってみれば、期待を食い物にする連中だ。

彼らは、必ずしも見るからに危なげないでたちをしているとは限らない。

ひと目で悪人とわかるような姿では決してカモはひっかかってこない。といって美しすぎるのも駄目だ。洗練も度を過ぎれば、カモになるような田舎者は気おくれし、うまく罠（わな）の奥まで入ってこない。

罠のエサに最適なのは、若くてかわいらしく、見た目では決してそうとは思えない少女である。舌足らずな喋り方をし、まだ世間をよく知らないような大胆さを見せ、そして適当に

なれなれしい。

成熟した女性ではないが、といって子供でもない。そこに間抜けなカモはひっかかる。

もちろんカモの身ぐるみをはぐのは、彼女たち女の仕事ではない。背後にいるプロの受けもちだ。あっさりと、手際よく、そして情け容赦なく、カモの羽をむしり、肉を奪い、骨までしゃぶりつくす。

その手口は、盛り場が大きくなればなるほど、洗練され、機能的になっていく。それも当然で、カモにとっては一生に何度とない災難であっても、プロにとっては、「日常」の仕事にすぎないからだ。

こうしたプロは日本中の盛り場にいる。そして、最もそのプロの数が多く、プロどうしの競争が熾烈（しれつ）で、手口が完成しているのが東京の新宿である。

二千軒以上の飲食店を抱え、週末には四十万人を超す人間が流れこみ、しかもサービスを受ける側も施す側もさまざまな国籍を有している。この街でしか成立しない〝商売〟があり、この街を離れたら生きてはいけないと信じる人間も多い。

彼らから見れば街は生き物である。街は人を生かし、ときに人を食う。食われた奴は死ぬまでだ。もしかすると自分たちは、街と戦っているのかもしれない、とすら思うことがある。盛り場で生きるというのは、街と戦うことなのだ。

勝てば大金、負ければ棺桶。
負けるのが恐ければ、街にこなければいい。戦いを挑まなければいい。
当然の話、勝つ奴よりも負ける奴の方が多い。
なのに人々は次から次へと街にやってくる。次から次へと街に食われていく。こうして街はどんどん肥えていく。夜明け頃、耳をすませば、新宿がゲップをする音が聞こえる筈だ。
新宿のゲップ――それは人間たちにはサイレンの音として聞こえている。
救急車、消防車、警察車、サイレンが聞こえるとき、ああ、また誰かが食われた、新宿の住人はそう思う。首をふり、息を吐き、ときにはにやりと笑って。

2

「あれいこ、あれ」
靖国通り、歌舞伎町一丁目の入口で背のびをしてカモを捜していたエリがいった。杏(あん)はその声にふりかえった。
夕方の六時過ぎ。桜はとうに散り、もうじきやってくる初夏の予感に街は華やいでいる。

ゲームセンターの電子音と客を呼びこむビルのアナウンス、あちこちから開こえてくる音楽で、ここだけ空気が濃い。
エリが見つけたのは、ＪＲ新宿駅の方角から横断歩道を渡ってやってくるイモだった。ジーンズに、真冬に着るような厚手のシャツを着て、バックパックを片手に提げている。
どこがどうとはいえないが、服装やあたりに向ける物珍しげな視線で、そいつが田舎者だというのはすぐにわかる。
年齢はいくつくらいだろう。二十(はたち)にはなっているかもしれない。
「あんまりもってなさそうじゃん」
杏はいった。
「馬鹿ねぇ。ああいうのが都会(まち)でてくるときはもってんのよ。絶対いいって！」
エリは力をこめていう。そして杏が答えるのを待たず、横断歩道を渡りきった若者の前にとびだしていった。
「こんにちはー」
明るい声でいって立ち塞がる。若者は当然、足を止めた。
それはそうだ。茶髪でマイクロミニで、超かわいい十代の女の子ふたりに声をかけられたら、たいていの男は立ち止まる。立ち止まらないのは、ホモくらいのものだ。

エリは上目づかいに思いきりかわいい顔で若者を見あげた。
背が高い。ひょろりとしているように見えるが、まくられた袖からのぞく肘から下が意外にがっしりとしていることに杏は気づいた。
「あの、今日、これから、二時間くらい暇じゃありませんか」
エリが舌足らずな口調でいう。若者はエリを見やり、それから杏に目を移した。
杏はどきっとした。ハンサムじゃない。今の言葉でいうなら濃い顔で、杏の好みではない。杏は面食いだ。女みたいといわれるような、きれいな顔の男が好きなのだ。
なのに若者と視線が合ったとき、杏はどきりとした。
それは若者の目のせいだった。吸いこまれそうな透明感がある。まるで子供のように純粋そうな、きれいな目をしている。
まちがいない。折り紙つきの田舎者だ。
「あの、この先のお店で、友だちがパーティやってるんですけど、男の人が集まんなくって、困ってるんです」
ふつうに聞けば、誰でも嘘とわかるセリフだ。なのに、十九歳のメチャマブの口からでると、たいていはだまされる。

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。